

ぜん た さん べい もの がたり
善太・三平物語

坪田 譲治



中

偕成社文庫 3019

ぜん た さん べい ものがたり
善太・三平物語

坪田譲治



偕成社文庫

3019

著者 坪田譲治 (つばた じょうじ)

1890年岡山県に生まれる。早稲田大学英文科卒業。芸術院会員。1926年『河童の話』で文壇に出て以来、多くの小説・童話を執筆しつづけて、現在も「びわの実学校」を主宰する。著書に『坪田譲治全集』『坪田譲治童話全集』がある。住所／東久留米市学園町1-14-9

偕成社文庫 3019

小学上級以上向

ぜんた さんべいものがたり
善太・三平物語

1977年3月 1刷

1979年3月 3刷

NDC 913 284P 19cm



著者 坪田 譲 治

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5

発行者 今 村 廣

東京都板橋区栄町23-4

印刷所 新興印刷製本株式会社

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5
振替・東京5-1352番 ㊦162

© Joji Tsubota 1954 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

8393-650190-0904

ぜん た さん べい ものがたり
善太・三平物語

坪田譲治



偕成社文庫

3019

もくじ

風の中の子ども

一、けんか	10
二、夏休み	18
三、おまわりさん	29
四、おじさんの家へ	49
五、三平の冒険 ぼうけん	67
六、善太のるす番	92
七、三平帰る	103
八、ごはんたき	114
九、悲しみと喜び かな　よろこ	130

お化けの世界^{おばけのせかい}

一、獅子と大蛇^{ししとだいじや}

154

二、お化けなんかこわくない^{おばけ}

167

三、雲の峰^{うねのみね}

185

四、冬

197

すずめとかに

201

ひまわり

一、びんぼう

218

二、砂の中の金^{すなの中のきん}

221

三、あげはちょう

225

四、三平の心配^{さんぺいのしんぱい}

230

五、火災保険^{かさいほけん}

235

六、イタズラ

243

けしの花

一、秘^ひ密^{みつ}

252

二、にいちゃんの魔法^{まほう}

261

三、三平の魔法

272

解^{かい}説^{せつ}

水^{みず}藤^{とう}春^{はる}夫^お

279

さし絵・中尾
彰

風の中の子ども



一、けんか

テーブやひもを織る工場が村のはずれに立っていた。資本金八万円、職工四十人。それでも組織は株式会社で、明治の時代に建てられ、赤レンガのエンツツを高くそびやかしていた。

夏のある日、その会社の近くの石橋の上で、三平と金太郎がであった。三平は一年生、金太郎は二年生。ところで、そのとき金太郎がニヤニヤ笑ったのである。三平をばかにした笑いかたである。

「なんだい。」

三平がとがめた。しかし金太郎はニヤニヤをやめない。

「なんだい。」

三平はけんか腰になる。と、金太郎が顔をつきだしていう。

「おまえんとこのおとうさん、こんど会社をやめさされるんだぞう。」

「ウソだあい。」

三平さんぺいがいう。

「ウソなもんかい。見てみる。やめさされて、警察けいさつにつれていかれるんだ。おまわりさんにくくられて、ごめんなさい、ごめんなさい、いいいいひっぱっていかれるんだ。」

「バカッ。」

もう承知しょうちできなかった。三平さんぺいは棒ぼうをひろうと、金太郎の頭をたたいた。コツンと大きな音がした。そこで棒ぼうをなげつけて、家のほうへかけだした。十間けん（一間は一・八メートル）ばかりでふりかえると、金太郎顔かおをまっかにして追いかけてくる。とっさに、道の小石をひろいとり、金太郎になげつけて、また家のほうにかけだした。家に五、六間けんのところにくると、門に兄の善太ぜんたが立っていた。それを見ると金太郎は追うのをやめた。なにしろ、善太ぜんたは五年生である。

「どうしたんだい。」

善太ぜんたが声をかけた。

「だってさ——」

金太郎が大声で語りかたはじめた。

「ボク、なんにもしないのに、三平チャンが棒ぼうで頭をぶつんだもん。大きなコブができ

「ちやった。」

金太郎は頭に手をやり、さも痛いたそうな表情ひようじようをして見せる。

「ウソだあい。」

三平は左足を前へだしてかまえている。しかし善太ぜんたとしては、いちおう三平をしかっておかねばならぬこの場のありさまだ。

「三平チャン、イタズラしちゃだめだよ。」

「ウソだあい。」

三平はくりかえす。

「だって、いま、棒ぼうでぶったじゃないか。」

金太郎が一步いっぽふみだした。

「ウン、ぶった。」

三平は応おうじる。

「どうしてぶったんだい。」

これには三平こまるのである。目をバチクリやるよりしかたがない。でも、三平も一步ふみだしていったのである。

「ぶった。ああ、ぶった。」

このことばと調子ちようしの中に、理由りゆうの存ぞんすることをいいふくめた。それは善太ぜんたにわかってもらえない。

「だめだよ、三平ちゃん。」

善太はこんなしかりかたをする。

「だってさ、金きんちゃん、わるいんだもの。」

三平がいうと、すぐ金太郎がアゴをつきだしていつてくる。

「わるいかあ。わるけりゃいつてみる。」

これはこまった。返答へんとうは口いっぱいにみちみちて、ほおさえ熱あつくなってくる。それでも口の外へはでてこない。すばやく石をひろいあげ、右手を高くふりあげた。石に返答へんとうさせるのである。と、善太が前に立ちはだかり、その手をだきかかえる。

「だめだよ。らんぼうすんなよ。」

「ウウン、金ちゃん、わるいんだもん。」

善太の手の中で、三平はからだをゆすってあばれた。

石をなげようとする三平を、善太がだきとめているそのすきに、金太郎は一步一步うしろむきにひきあげた。やっと男子の体面をたもつことができた。十間ばかりいったとき、そこで彼は大声をあげた。

「やあい、三平のばかやろうッ、おまわりさんにくくられて、ごめん、ごめん、ごめんなさァい。」

節をつけて、腰をかがめ、ひとおどりにげていった。善太と三平はならんでこれを見送った。三平はまだくやしくて、右手の石をそのときいっそうかたくにぎりしめる。橋の上で金太郎がもうひとおどりしてみせると、三平はそのほうに五、六歩いきおいつけてかけだし、とどきもしない彼にむかつて、力いっぱい石をなげた。金太郎がいよいよ見えなくなったとき、はじめて、善太にいつてきかせた。

「金太郎ばかなんだよ。」

「どうしてばかなんだい。」

「ウン、あいつね——」

いきおいこんだが、この話はどうもすこし行きづまる。

「うちのおとうさんが会社をやめさされるって。それから、おまわりさんにひっぱって